

終える命、

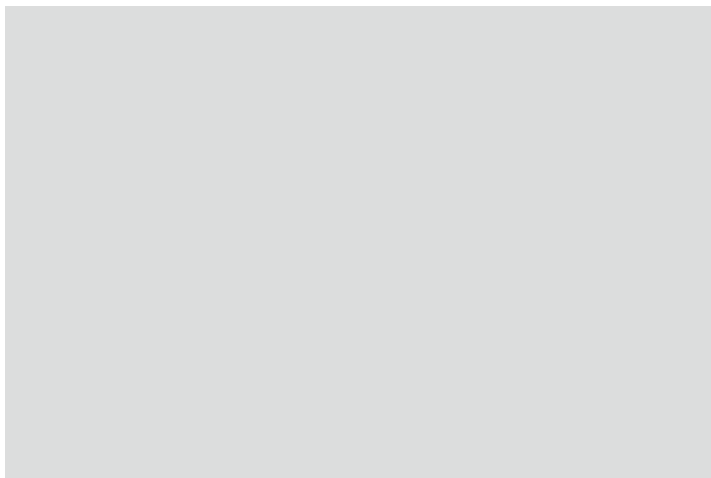
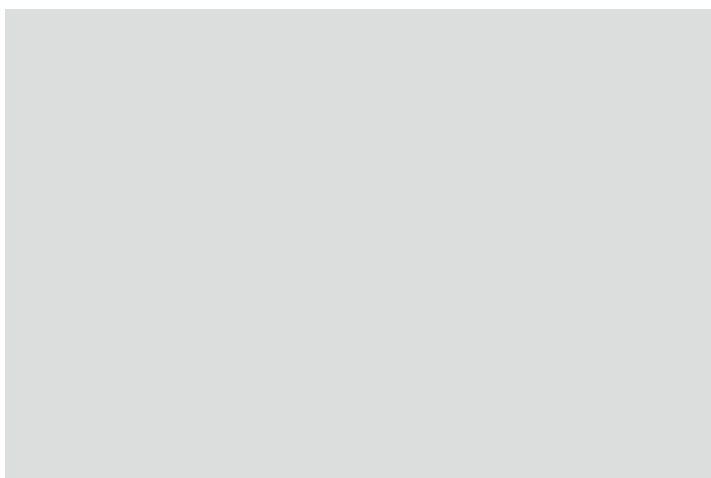
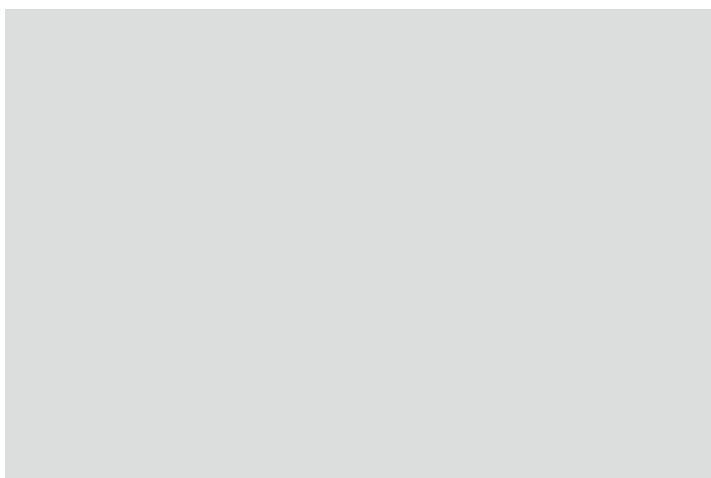
つなぐいのち

國森康弘

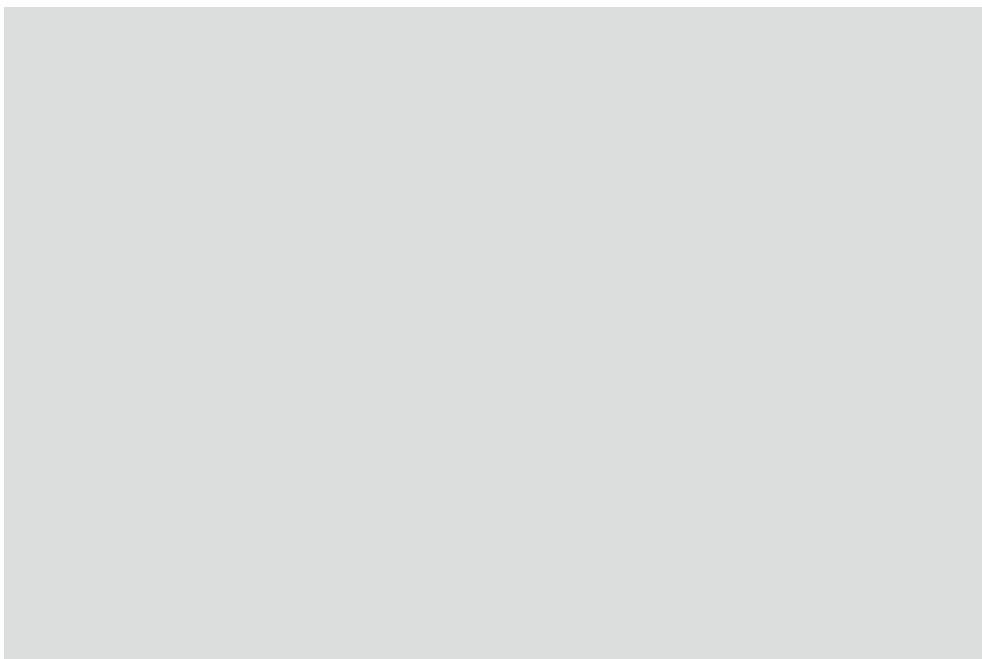
第12回 老老介護支える連携

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

ああ、おおぜいで見てくれるなら、ありがたい。
おじいさん、家にいてもらえるわ。



深まる認知症。
その奥底で、
想うこと……。。



わ

たし、このおじいさん、ひとりで見る自信
ないわあ」。疲れた表情で妻の道子さんは、
つぶやいた。夫の秀山さんは、滋賀県東近
江市の永源寺地域にあるお寺の住職さん。認知症が深
まってあちこち歩き回っていたのが家族には大変だっ
たが、近ごろではそれもなく、寝ていることが多
くなった。代わって、褥瘡ができ、誤嚥の可能性も高
まっていた。

「ヘルパーさんにしょっちゅう家に来てもらうのは
苦手。いっそ、病院か施設に入ってもらったほうが
……」と道子さん。一方、毎日のように秀山さんが、
ショートステイやデイサービスに通っていた施設は、
「食事が半分も食べられなくなったら、うちでは預か
れない」との反応だった。

「そしたら、いっぺん集まりましょう」。秀山さんと
道子さんの前に、プロたちが一堂に会す。ケアマネ
ジャー、薬剤師、ヘルパー、理学療法士、福祉用具の
専門家、看護師、そして永源寺診療所の花戸貴司医師
……。専門職の人たちは時間をやりくりして、集まっ
てきた。花戸医師はこの日までは、秀山さんが熱を出
した際に往診する程度だったが、今後どうすれば専門
職の連携によって、道子さんら家族の負担を軽減でき

るかを話し合った。

薬はわかりやすくまとめ、家まで届ける。褥瘡の
できにくいマットに交換する。訪問診療や訪問介護は
もちろん、何かあれば往診に駆けつける。「もう力が
入らない老衰の段階だから、外へ外へではなく、家で
ゆっくり過ごしてもらう時期。おばあさんはがんばら
なくていいから、私たちにどんどん任せてね」。

道子さんは手を合わせて言った。「ああ、こんな
おおぜい皆さんが来て、見てくれるなら、ありがたい。
おじいさん、家にいてももらえるわ」。多職種連携の支
えと、気持ちに少し余裕ができた道子さんら家族の寄
り添いを通じて、褥瘡はよくなり、ごはんの量も増え
た。

あれから2か月あまり、道子さんは秀山さんとの時
間を過ごし、その最期を見送った。ちょうど、東日本
大震災の被災地から孫が戻ってきたときだった。その
孫らを交えて、息を引き取った秀山さんの髪の毛を
剃った。「最後までいい、お坊さんに戻してあげなくちゃ。
よかったねえ、おじいさん。ありがとねえ」と何度も
声をかけていた。そして、息子と孫たちが、秀山さん
をおぶって、お寺の本堂に連れて行つた。（撮影は2012

（13年）

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。
2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。